

木原武一著「大人のための偉人伝」新潮選書、新潮社 1989年7月20日刊を読む

天才の学び方(15) エジソン (1847～1931)

○「天才とは 99 パーセントの努力 (Perspiration) と 1 パーセントの靈感 (Inspiration) ですよ」

* perspiration (パースピレーション) を「努力」と訳してみたが、もともとは「汗を流すこと」「汗を流して働くこと」という意味である。

* このエジソンの言葉は「パースピレーション」と「インスピレーション」を呼応させた語呂合せになっている。

○「休むことは錆びることだ To rest is to rust」

○生涯に、一千を超える特許を取得したエジソンであるが、実のところ、彼はだれにも思いつかないような何か独創的なことを成し遂げたわけではなかった。その発明のほとんどのものが、先人のアイデアや研究の延長上にあった。

○「ものごとを明らかにする最善の策は、勤勉に仕事をして、実験室の中で、時間をかけてすべてをためてみることだ」

○エジソンは、白熱電球の開発にあたっては、寿命の長いフィラメントの素材を求めて、木の皮や棒切れ、雑草、トウモロコシの茎や馬の蹄など、手に入るあらゆるものについて調べ、その結果をひとつひとつノートに記した。そういうノートを、エジソンは生涯に 3400 冊も残している。1年に平均 70 冊、5日で 1冊。エジソンは最適のフィラメントを見つけるため、世界中をくまなくあさって、少なくとも 6000 種の植物をテストしたと言っている。その結果、日本の竹が採用された。

○だいたいエジソンの研究所では、なにごとにつけ 1000 単位の回数で実験が行われていたようだ。

○エジソンはみずからの発明を一種の社会的出来事に仕立て上げ、広く宣伝。投資家や実業家から多額の資金を引き出すことに成功し、電球とその付属品の大量生産にはじまって、発電所の建設や電灯線の敷設など、家庭や事務所に新しい電気の光をとるための一大システムを完成させることができた。

○何か新しい発明に取りかかる際には、当然のことながら入手可能なあらゆる文献に目を通すことを怠らなかつたし、研究所には汗牛充棟の図書館をそなえ、大学で専門理論を学んだ数学者や物理学者を雇ってこいた。まったくの闇夜を手さぐりで歩いていただけではなかつた。

○可能な時間のほとんどすべてを仕事に注ぎ、研究に夢中になると、周囲のことはもちろん、時間も場所も、ときには自分の名前さえも忘れることがあったという。その異常なまでの集中力である。

○「私は、発明を続ける金を手に入れるために発明しているのだ」

仕事を続けるために仕事をする。

「仕事こそ、人生を楽しむ最上の方法である」(カント)

エジソンはそれを十分実践した人間。「99 パーセント」ということばはそのことを言っている

